

## ◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

てんじ かいせつ  
 展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

てんじん  
 天神、海をわたる

松の木の下に立ち、こちらをじっとみつめるこの男性（図1）、一体どこの国から来たのでしょうか？するどい目に長いひげをたくわえた姿は、特殊能力をもった中国の仙人のよう。頭にかぶる不思議な頭巾や服の感じも、どうも和服ではなさそうです。左肩からバッグのようなものを斜めがけにして、梅の枝をかかえています。これらの小道具は一体なんのでしょうか？

この絵のタイトルは「渡唐天神像」。これは唐の地、つまり中国に渡った天神の像という意味で、天神は菅原道真という今から1100年あまり前、平安時代前期に活躍した有名な政治家をさしています。歴史のマンガや教科書などでは、飛鳥時代（7世紀）から日本に最新の中国文化をもたらしてきた遣唐使を終わらせ、国風文化が盛りあがるきっかけの一つをつくった人として説明されることの多い人です。つまり、日本人なのですね。

子供のころから学問、作文、作詩にと天才ぶりを発揮して神童ともてはやされた道真は、成長して政治家として活躍し



図1 渡唐天神像 狩野元信筆 室町時代(16世紀) 京都国立博物館

ましたが、政治の争いに敗れて大宰府（現在の福岡県）に左遷され、失意のうちに亡くなりました。死後、都では天災や関係者の死がつづき、道真のたたりと恐れられ、彼は神としてまつられることになります。これが「天神」で、菅原の苗字をとって「菅公」とよばれることもあります。初めは恐ろしい神でしたが、学問や文芸を愛した道真の人がらにちなみ、じきに私たちの今知るような、ありがたい神となりました。

ちなみに京都の道真の屋敷の庭には梅の木があり、梅は九州にゆく道真を追って飛びさったと伝えられ、天神のトレードマークは梅の花となっています。物語によっては、松や桜も登場します。松は、梅が追ってきたのになぜお前は来ないと言われてあわてて追いかけてきた、桜は、道真が最後まで声をかけてくれなかったのが悲しくて枯れてしまったのだとか。それもあって、天神像には梅と松をそえるのが一般的です。最初に見たとおり、「渡唐天神像」にも梅と松があり、この知識をふまえれば、描かれているのが日本の天神であることははっきりとわかりますね。

しかし、描かれている不思議なファッション、これはもとの天神の物語には出てこないものです。これは道真が亡くなり、天神が誕生してさらに何百年かたった14世紀、禅のお坊さん（禅僧）たちが考えた全く別のストーリーにもとづいています。禅は中国からもたらされ、鎌倉時代（13世紀）に本格的に日本に根づきますが、日本の禅僧たちが師匠とあおいだえらい中国人僧の一人に、無準師範という人がいました。日本の僧たちは、天神が夢の中で空を飛び、はるか時空を超えて無準和尚に会いに行き、禅をマスターしたという新しい物語をつくります。これが「渡唐天神」です。当時の禅僧のなかには留学経験のある国際人が多く、国中でもっとも教養ゆたかで、文学を愛した人たちでもあったので、学問や文芸をつかさどる天神の力を深く信じました。道真の亡くなった九州が、朝鮮半島や中国に一番近い日本の海の玄関口であったのも、国際人であった禅僧たちの心をとらえたようです。「渡唐天神像」のまるで中国の仙人のような姿は、時空を超えながら夢と現実を行き来し、空まで飛んで大陸にわたるといふ摩訶不思議な力をイメージしたものでしょう。肩からかけるバッグのようなものには、お坊さんが身につける袈裟などが入っています。

歴史上の道真自身は、けっして中国にわたることはありませんでした。寛平6年（894）、彼は遣唐使の大使に任命されますが、当時の中国は内戦で混乱して渡航は実現せず、道真のもとで遣唐使はついにその役目を終えることになります。しかし約500年後、物語と絵のなかで、道真は自身、全く思ってもみなかった形で中国にわたることになりました。不思議な「渡唐天神像」のすがたには、そんなはるか昔の人々の豊かな想像力と、海をへだてた日中の国際交流の深く、長い歴史が秘められています。

（美術室 森 道彦）